

Senior Community

2016年1・2月号

特集

介護保険制度の15年を振り返る

■ 卷頭インタビュー

国民一人ひとりが「生きること」の意味を考えることから新しい日本の介護が始まる

淑徳大学総合福祉学部教授 結城康博氏

■ 新医療通信

医療法人社団悠翔会×在宅医療カレッジ特別企画

「地域包括ケア時代に求められる医療と介護の役割」

■ 先進地・スコットランドから学ぶ 当事者が提言し、動かす認知症戦略

<http://www.hhcs.co.jp/> 地域包括ケア・ケアマネジメント・デイサービス・サ高住・老人ホーム・病院・診療所



併設した駄菓子屋が大盛況のサ高住 自然な取り組みで入居者が元気に

株式会社シルバーウッドは2015年5月、東京都足立区にサービス付き高齢者向け住宅「銀木犀<西新井大師>」を開設した。同社6棟目の高齢者施設・住宅で、併設した駄菓子屋には子どもたちが放課後に大勢集まつてくる。できることは自分で行うという運営方針のもと、「ドラムサークル」と呼ばれる認知症予防プログラムなどが入居者を活気づけている。

子どもたちが集まる駄菓子屋で 自然と生まれる地域交流

「銀木犀<西新井大師>」は、サービス付き高齢者向け住宅（サ高住）の激戦区といわれる東京都足立区に開設した。東武鉄道大師線終点の大師前駅と、正月に初詣客で賑わう西新井大師から徒歩約12分の住宅街。約122m²の敷地に地上3階建て、総戸数48戸の建物は、いかづち公園と栗原中央公園の2つの公園の中間に位置している。代表取締役の下河原忠道氏が現地を視察したとき、子どもが多い地域と見受けられたことから、駄菓子屋の併設を決めた。駄菓子屋は、2014年11月に既存のサ高住「銀木犀<鎌ヶ谷>」で先行的にオープンしており、子どもたちに大人気だという。

「駄菓子屋はコミュニティスペースのようなもので、地域交流の取り組みとしてふさわしいという発想からオープンすることになりました」と、<西新井大師>の所長を務める麓慎一郎氏。2015年5月1日に事業所として開設した<西新井大師>では、

掲示板のポスターの片隅に駄菓子屋が近日オープンすることを告知したところ、近隣の子どもたちや母親から「オープンはいつになるのか」と、これに期待する声が日に日に高まっていたという。店番を入居者にお願いするスタイルで、店長に立候補してくれた男性が実際に入居してからのオープンを予定していたが、結局はひと足早く5月中旬にオープンすることになった。

営業時間は毎日午後3時から4時30分までの1時間半。オープン当初から、これまで駄菓子屋というものを知らなかった子どもたちが列をして訪れ、彼らの口コミでその噂はどんどん広まつていった。近くのコンビニではあまり見かけない、10円から30円までの安価な商品を中心とした豊富な品揃え。今では多い日で1日に50～60人が来店し、1万円近くを売り上げることもあるという。店長を中心に店番をする入居者とこれを手伝う職員は、子どもたちとすっかり顔なじみ。夏休みをきっかけに隣接する食堂を開放したところ、駄菓子を買いにきた子どもたちが遊ん



株式会社シルバーウッド
銀木犀<西新井大師>所長 麓 慎一郎 氏

だり宿題をしたりする場所にもなつた。食堂にいる入居者と会話する機会も生まれることになる。

「入居者の方々にも喜んでいただいているし、見学にいらっしゃったご家族からも高い評価をいただいている。特養の施設長を務めた経験もあるのですが、いかに地域を巻き込んだイベントを実施するかと考えたとき、子どもたちを呼びたければ、保育園などに出向いて交流しませんかと持ちかけるしかありませんでした。ところが特別な動きをしなくとも、駄菓子屋には自然と子どもたちが集まつきます」（麓氏）

週に1度の仕入れ作業は楽ではなく、駄菓子屋だけで採算が成り立つものでもない。しかし、高齢者は子どもたちと触れ合うことで笑顔になり、子どもたちは高齢者と接することで思いやりの心を育む。これからサ高住に求められる地域交流の仕組みが、駄菓子屋の併設によって自然と作られるわけである。



豊富な種類の駄菓子を前に、真剣に吟味する子どもたち



84歳になる入居者の男性が店長を務める



音の輪が広がっていくドラムサークル

コミュニケーション能力と 脳活動に働くドラムサークル

2015年4月、アジア太平洋地域における高齢者ケアで優れた業績を上げている事業者を表彰する「第3回アジア太平洋高齢者ケア・イノベーション・アワード2015」がシンガポールで開催された。部門別に賞があり、「銀木犀」は最も著名な部門「Residential Aged Care(施設介護)」で最優秀賞を受賞。特に認知症予防プログラム「ドラムサークル」の取り組みが評価された。

ドラムサークルは、ファシリテーターと呼ばれる指揮者を中心に、演奏者が輪のように並んで打楽器を鳴

らす即興演奏。「脳トレ」で知られる東北大学加齢医学研究所の川島隆太教授と共同して取り組み始めたプログラムで、演奏者はファシリテーターの指示に従いながら、仲間とリズムを合わせ、音の輪を作り上げていく。演奏者のコミュニケーション能力と脳活動に働きかけることで、認知症予防に役立てられるという。

麓氏は「学習療法と同じ効果があり、演奏を褒めることによって脳の前頭葉が活発になります。高齢になってまで読み書き・計算をしたくないと敬遠される学習療法に対して、ドラムサークルは音楽の好きな人をはじめ、やってみようという入居者が意外と多いですね」と語る。

目に見えて元気になる高齢者
銀木犀を「第二の我が家」に

「銀木犀」では、できることは自分で行うという運営方針で入居者の自立支援に取り組んでいる。食事の配膳・下膳は、可能であれば無理のない範囲で入居者が行い、食事形態に制限のない比較的元気な人々は、お櫃で出されたご飯を自分で盛りつける。食事は施設にありがちな薄味ではなく、誰にもおいしい自然な味付けで、若い人でも満足できる普通の量。麓氏によると、高齢者が元を取り戻すには食事の力が大きい。

<西新井大師>の平均要介護度は2.6とサ高住にしては高く、延命措置を希望しない看取りの入居者も受け入れている。歩行器を使っても危うい歩行状態だった男性が杖をついて歩けるようになったり、着替えもできなかった女性が化粧もするようになったりと、入居者は目に見えて元気になっていくという。また、病院ではゼリー食をひと口で吐き出していた終末期の入居者が、毎食全量を食べるようになってから亡くなった。

「銀木犀は“第二の我が家”でありたいと思っています。自分が入居したときに何をしてほしいか、そこに近づいていくことが目標ですが、毎日を楽しく自分らしく生活できればそれで十分とも言えます。入居者の方々に、私は最期までここで暮らしたいとおっしゃっていただけることが幸いです」と麓氏。作為的ではない自然な取り組みの数々が、高齢者を元気にするのではないだろうか。